

Scramble Shot

務め、熱演していた。レオポルドのジョーン・オズボーンも確実なテクニックで冒頭から光っていた。新進ソプラノのフェラ=ロッチェ・ベッカーが熱演し過ぎて気品に欠ける王女を演じたが、声楽的にはパーフェクトでこれからが期待される。

ベルトラン・ド・ビリーの指揮も、普段は前衛過ぎるカリスト・ピエイトにしては珍しい正統派演出も、あまり意識に残らないほど熱い公演であった。宗教の名を冠したテロ行為が続く現在、このオペラを通して、その争いの虚しさを伝えることはできないものだろうか。(6月26日所見) (中東生)



アレヴィ《ユダヤの女》から。なんと80年以上もバイエルン州立歌劇場で上演できなかった ©Wilfried Host

Opera バイエルン州立歌劇場が《ユダヤの女》をプレミエ

今年のミュンヘン・オペラ・フェスティバルの目玉新演出である、アレヴィ《ユダヤの女》は、第二次世界大戦前夜から80年以上もこの劇場で上演することができなかった作品で、これを華やかなフェスティバルの幕開けに上演できることの意義を、バイエルン州立歌劇場総裁のニコラウス・バッハラー氏は、終演後のパーティで感慨深く語っていた。

ユダヤ人のエレアザールを、ラテン男の代表のようなロベルト・アラニーヤがどう演じるのか興味津々だったが、彼の母国語である美しいフランス語と、輝かしい声を駆使しつつ、落ち着いた歌唱に体当たりの演技で新しい境地を開いた。しかし、最後のアリアでは音程が常に低めで、声もかすれ気味になり、疲れが出ていた。

娘のラシエル役にはクリスティース・オボライスが予定されていたが、王女役のアレクサンドラ・クルザクが代わりに